

清熱補氣湯

矢数道明著「漢方治療百話」第1巻

心下痞

高橋道史著「漢方診療の実際」

げんぺき 半夏

大塚恭男「治療学」7巻5号

大黃の精神作用

矢数道明・西山英雄・石原明「漢方の臨床」9巻 7巻

延経期方

「明治前日本医学史」第4巻

急喉痺 喉癰 纏喉風（ジフテリア）流行の記載。

（同愛記念病院）

（墓銘の読点、返点は岡山泰四氏の御
教示による。ここに謝辞を呈します。）

武相の種痘——平塚宿の場合

深瀬泰旦

一、はじめに

相州平塚宿は江戸から一五里半、東海道五三次の宿駅の一つである。東西約一八丁、南北約二三丁、南に相模湾をのぞみ、東は相模川、西は花水川を境として、おおむね平坦地で松林のおおい土地である。

順天堂大学山崎文庫には、この平塚宿での天然痘の罹患状況と、種痘の実施状況をしるした『種痘天然痘取調書上簿』が蔵されている。武相の種痘の一部として、昨年の総会ではジョージ・ニュートンの種痘事業について報告したが、今回はこれによって幕末から明治にかけての天然痘と種痘の状況について報告する。

二、『種痘天然痘取調書上簿』

扉には「嘉永四年辛亥ヨリ明治八年五月迄」と収載期間が明記されており、中央に書名、左下には「第二大区十小

区大住即平塚宿分」とある。しかしこの「第二大区」は「第二大区」が正しい。

本文は二九丁、筆蹟、料紙とも末尾にいたるまでまったく同一である。その記載の様式は、天然痘の場合は上段に罹患年月、中段に「天然痘」とし、下段は個人名がしるされている。一方種痘については上段に実施年月、中段に施術者名、下段に被接種名がしるされている。一丁には一〇乃至一四名の姓名がしるされており、第一番屋敷の原田徳次郎の家族三名からはじまって、途中欠番もあるが第一四四番屋敷田中師芳までの一一一家族、三三七名が収載されている。うち一名は姓名をあげるのみで内容の記載がないので、今回の調査では三三六名について検討した。

三、天然痘の罹患状況

嘉永五年（一八五二）から明治八年（一八七五）の二三年間に、発生のない年は明治二年、六年、七年の三回であり、一〇例以上の発生があった年は明治八年の五七例をはじめとして、安政三年（一二例）、文久元年（二五例）、文久三年（二四例）、慶応二年（一九例）の五回である。

その月別分布では、三月が一〇三例で六一%をしめ、二

月が三〇例（一八%）、四月が二六例（一五%）、五月が八例（五%）で一月と八月はそれぞれ一例のみである。このほかの月には一例もみられていない。

罹患年齢は四歳の二八例をピークとして、一歳から二一歳におよび、平均年齢は五・五歳で、一歳児も四例みられる。

なおこのころの平塚宿の戸数と人口は、平塚市博物館蔵『戸簿籍』（明治一〇年一月一日調）によると三九九軒、二〇六七人である。

四、種痘の実施状況

一方種痘は安政三年（一八五六）が初出で、以後明治八年までの一九年間に一八七例について実施されている。明治六年の三九例を最多年として、明治八年（三二例）がこれにつき、毎年すくなくとも一例は実施されている。

実施月についてみると三月が一二九例（六九%）、二月が四八例（二六%）でこの二カ月にほとんどの例が実施されている。しかも一月から四月にすべてが集中し、その他の月では一一月に一例が接種されているにすぎない。

実施年齢は一歳から一八歳におよんでおり、二歳、三歳

が一〇例(五九%)をしめる。これを明治新政府が大政官達として、種痘の実施方を全国に布達した明治三年をもって前期と後期にわけると、明治二年までの前期においては、一歳児〇、二歳児五例、三歳児三〇例、四歳児二一例に対して、明治三年以後の後期では一歳児六例、二歳児四六例、三歳児二九例、四歳児一一例と、後期において明らかに低年齢化の傾向にあることをしめしている。

これらの種痘は八名の医師によって接種されている。豊田村の馬場某が五七例、国府津村の間嶋英山が五四例、大磯宿の鈴木正雅が五二例、石井玄界が一一例、塩海村の伊達某が一〇例で、杉村連信、片岡村の和田某、矢端村の中西千里がそれぞれ一例である。住所の記載のないのは平塚宿在住といつてよいだろうか。

これらの医師については不明のものも多いが、事蹟を明らかにし得た二、三についてもあわせて報告する。

(順天堂大学医史学研究室)

津藩の種痘

茅原 弘

津藩における種痘の記録としては嘉永三年(一八五〇)冬藩校有造館督学齋藤拙堂が其の孫娘に種痘を受けさせたのが最初である。次いで同四年南勢地区の藤堂領の大庄屋中川九左衛門が子供に受けさせている。この年の秋藩当局も初めて種痘の奨励にふみ切り、領下に触を出し、次いで同年十二月京都の新宮涼閣の来津を得て津で種痘を行なった。

最初は種痘を受ける者は少なく、中川九左衛門も奨励に苦労していたが、たまたま同年より嘉永七年にかけて天然痘が流行し種痘の効果が知られ受ける者が増加した。このため藩は嘉永七年五月津立町に種痘所を新設し、同六月九日開所し無料で八日目毎に施術することとした。

齋藤拙堂は漢学者であったが、当時藩の重臣藤堂数馬(藩校総教、藩新軍制の責任者の一人、火薬製造中爆死)、平松